平成15年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発 掘 調 査 報 告 書

2004.7

大阪市教育委員会
㈶大阪市文化財協会

例　　言

1．本報告書は平成15年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。

2．これらの調査は大阪市教育委員会が㈶大阪市文化財協会に委託して実施したものである。

3．本報告書の執筆は㈶大阪市文化財協会　京嶋覚の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。

4．本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護課において行った。

目　　次

Ⅰ 中 央 区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW03－1）報告書 …… 3

難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW03－10）報告書 …… 7

大坂城跡発掘調査（OS03－20）報告書 …… 9

西心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査（NB03－1）報告書 …… 15

Ⅱ 天王寺区

大坂城跡発掘調査（OS03－7）報告書 …… 23

摂津国分寺跡発掘調査（SK03－2）報告書 …… 27

Ⅲ 旭　　区

森小路遺跡発掘調査（MS03－5）報告書 …… 33

Ⅳ 住 吉 区

山之内遺跡発掘調査（YM03－7）報告書 …… 41

Ⅳ 平 野 区

長原遺跡発掘調査（NG03－3）報告書 …… 47

Ⅰ 中　央　区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査(ＮＷ03－１)報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区上町１丁目28－７他２筆
・調 査 面 積　約105㎡
・調 査 期 間　平成15年４月７日～平成15年４月22日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・李陽浩

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は難波宮跡公園の南側に位置し、難波宮中軸線から西に約150mのところにある(図１)。この場所は前期難波宮朝堂院南門の西延長線上・後期難波宮五間門の南延長線上に当る。周辺では数次の調査が行われており、古代の遺構や遺物は前・後期難波宮および京を考える上で重要である。

この度、標題の建設工事が行われることになり、平成15年２月27日に試掘調査を行ったところ、地山上面において古代のものと思われる柱穴を検出したため、本調査を行うこととなった。

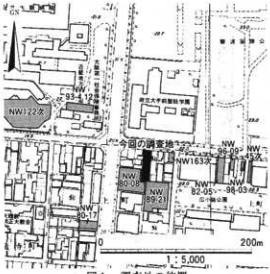


図１　調査地の位置

調査では試掘結果に基づいて地山直上までの地層を重機で除去し、その後人力によって掘削を行った。遺構はすべて地山上面で検出し、適宜図面・写真などの記録作業を行った。埋め戻しを含む発掘調査に係るすべての作業は４月22日に終了した。

なお、本報告で用いた方位は旧来の日本測地系(国土平面直角座標第Ⅵ系)で、標高はT.P.値である。

〈調査の結果〉

１．層序

本調査地では地山が高く、一部古代～近世と思われる堆積層が存在するものの、ほとんどの部分で近・現代以前の堆積層を確認することができなかった。よって遺構はすべて地山上面で検出した。

なお、地山の最も高いところは調査地北部で、現地表下約0.3m(TP=20.2m)で検出された。

２．遺構と遺物(図２～４)

検出した遺構には柱穴・土壙などがある。ただ、いずれの遺構でも埋土に遺物があまり含まれず、すべて地山上面で検出したため正確な年代を知ることが困難である。よって以下の記述では、おもに

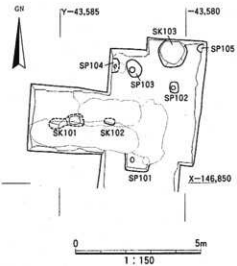


図２　地山上面遺構配置図（１）

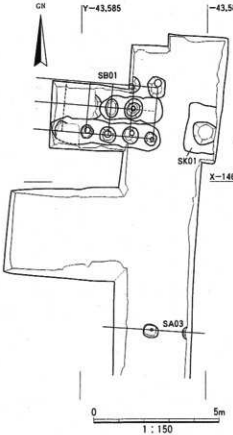


図３　地山上面遺構配置図（２）

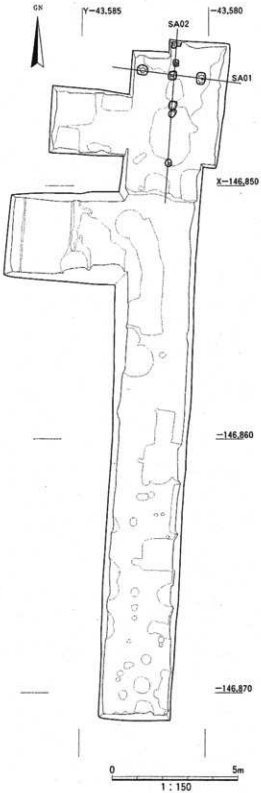


図４　地山上面遺構配置図（３）

切合い・埋土の状況からみたおおよその年代観を示すに留める。

古代の遺構としては土壙SK101～103、柱穴SP101～104などがある（図２）。SK101は上層の遺構に切られ、残りはあまりよくない。残存部分は隅丸方形で、長さ約1.4m、幅約0.5m、深さ0.35mである。埋土は炭・偽礫を含む褐～黄褐色の粗粒砂混りシルトで、中から土師器の細片が出土した。難

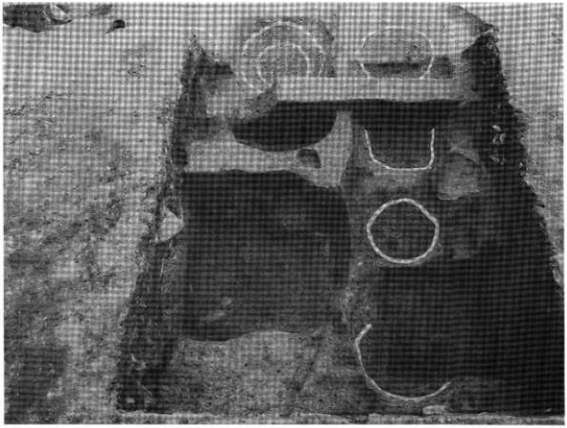
波宮下層の遺構と思われる。SK103は全体のかたちが不明であるが、検出した部分では直径約1.1mの不整形な円形で、深さは約0.15mである。埋土は炭を含む黄褐色の粗～細粒砂混りシルトで、中から土師器・古代瓦の細片が出土した。古代の整地層である可能性もある。SP101は北半分が攪乱されているが、一辺約1mほどの隅丸方形と思われる。深さ約0.25mで、柱痕跡は直径約0.15mである。SP102は長さ0.45m、幅0.3mの隅丸方形で、深さ0.15m、柱痕跡は直径約0.15mである。SP103は長径約0.7mの楕円形で、深さ約0.3m、柱痕跡は直径約0.2mである。SP104は全体のかたちが不明であるが、一辺約0.5mほどの隅丸方形と思われる。深さ約0.3m、柱痕跡は直径約0.15mである。これらの柱穴は、埋土が隅・偽礫を含む明褐色の粗～細粒砂混りシルトで共通しており、いずれも難波宮下層のものと思われる。

近世の遺構としては建物SB01、土壙SK01、柱列SA01～03などがある(図3・4)。建物SB01は検出した部分で桁行4間、梁行2間(いずれも1間=約0.9m)であり、桁行方向にどれほど続くのかは不明である。掘立柱の総柱建物になると思われる。柱穴は8個所で見つかったが大部分で布掘りを行った後に柱穴を掘削している。布掘り部分は南北に二個所あり、最も大きい南側のものは総長で東西の長さが約4.2m、幅約0.9m、残存する深さは約0.4mである。埋土は炭・偽礫を含む明褐色の粗粒砂含むシルトで共通する。なかから須恵器・土師器の細片が出土した。なお、一繋がりの布掘りは一度にすべて掘られたのではなく、何回かに分けて掘られたことが切合いからわかる。柱穴は直径約0.6mの円形で、柱痕跡は直径約0.15mである。埋土はどの柱穴でもほぼ等しく、炭・偽礫を含む褐色の極粗粒砂を含むシルトである。なかから古代の瓦片などが出土した。東妻中央の柱が検出できていないが、この部分は後世の地盤改良によって地層が改変されており、明確な痕跡が見いだせなかったところである。土壙SK01は埋土がSB01の布掘り部分と等しいため、同時期のものと思われる。内部には長さ約0.4m、幅約0.3mの礎石状の石が置かれていたが、何に用いたのか不明である。SA03も埋土の状況から同時期の遺構と思われ、SB01とほぼ平行に並ぶ。SA01・02は徳川期と思われるが互いに直行せず、時期差を示すものと思われる。

〈まとめ〉

今回の調査では難波宮の遺構を明確には検出できなかったが、難波宮下層の土壙・柱穴および近世の土壙・柱穴・建物などを検出した。地山が高く、あまり削平を受けていないとみられるため、本調査区内に難波宮の柱穴はなかったものと思われる。また、本調査区は後期難波宮五間門に取りつく一本柱塀の南延長線上に位置する。柱穴が検出されなかったことから、この一本柱塀は調査区よりも北側で終わるか折れ曲がるものと考えられよう。そうすると、NW27・28次調査で検出された南側の区画は範囲が極めて狭いものとなる。宮殿西側の区画がどのようになっていたのかについてはさらに検討を重ねる必要があり、付近でのさらなる調査が期待される。

調査区全景(南から)



SB01検出状況(西から)

難波宮跡・大坂城跡発掘調査(ＮＷ03－10)報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区上町１丁目35−20､21の一部
・調 査 面 積　約38㎡
・調 査 期 間　平成16年1月7日～平成16年1月16日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、後期難波宮朝堂院の南西に当り、前期難波宮「朱雀門」の南西に位置する。従来の調査では、調査地より南方で難波宮期の南北方向の建物が検出されている。本調査に先立ち、試掘調査を行った結果、地山面が高く遺存していることが判明し、難波宮期の遺構が存在することが予測されたため、敷地北側約38㎡を対象とし発掘調査を実施した。

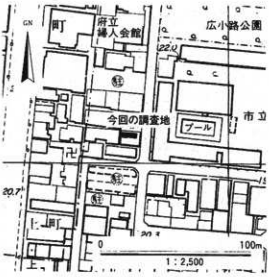


図１　調査地位置図

調査の方法は、江戸時代後期以降と思われる堆積層を重機で、それ以下の地山までを人力で掘削し、遺構の検出を行った。調査は、予定建物の掘削深度である地表下約1.5ｍまでとした。

なお、本報告で用いた方位は磁北で、標高はT.P.値である。

〈調査の結果〉

１．層序(図２)

第１層：第２次大戦後の整地層である。戦災による焼土、焼壁を含む層である。

第２層：褐色の砂質シルト層で、江戸後期以降の堆積層である。

第３層：明褐色の砂質シルト層で、黄褐色粘土質シルト(地山)の偽礫を多く含む層である。

第４層：灰色シルト質粘土層で、基本的には地山上面に堆積している薄層であるが、第２層と同じく江戸時代の遺物を含む地層である。

第５層：黄褐色粘土質シルト層で、いわゆる地山である。

２．遺構と遺物(図２・３)

柱穴群(SP01～07)　地山上面の遺構群で、調査区北端部で東西方向に並んで検出した。それぞれ

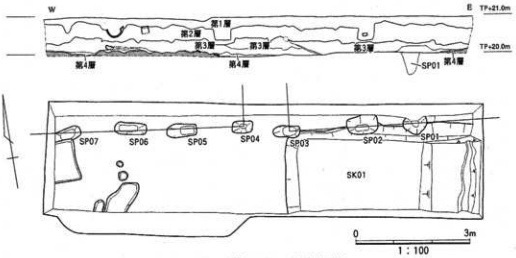


図２　検出遺構平面図・北壁断面図

平面形が東西に長い長方形を呈するという特徴を有する。柱穴の規模はSP01が東西1.1m、南北0.4m以上、SP02が東西0.8m、南北0.5m、SP03が東西0.7m、南北0.3m、SP04が東西0.5m、南北0.3m、SP05が東西0.8m、南北0.4m、SP06が東西0.8m、南北0.3m、SP07が東西0.7m、南北0.3mである。柱穴の深さは、検出面より0.3mから0.5mである。これらの柱穴は一連の柵列とも考えられるが、その柱間距離と方位からSP01～03とSP04～07の２つのグループに分かれるようである。

SP01～03は柱間約1.8mで、SP04～07は柱間約1.5mで、２棟の建物のそれぞれ南辺と推定される。建物の時期は、SP04から図３の備前焼擂鉢が出土しており、豊臣期に構築されたものであろう。

土壙SK01　調査区東端で検出した遺構で、第２層上面から検出した。南北2.2m以上、東西5.0m以上の平面長方形を呈する。南壁断面の観察結果から、西から東へ短期間に埋立てられたものと思われる。その時期は、出土遺物から江戸時代末頃である。その用途については、判然としないが穴蔵のようなものであろうか。

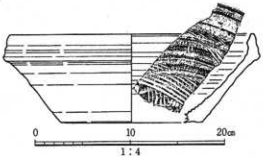


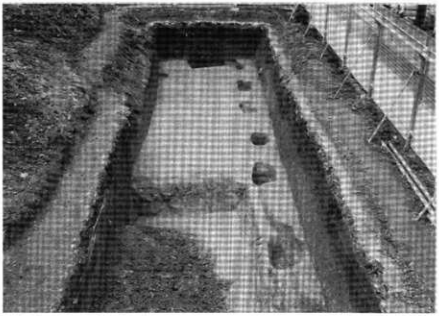
図３　遺物実測図

その他、古代以前に遡る遺物として、地山直上から須恵器甕の破片が出土した。

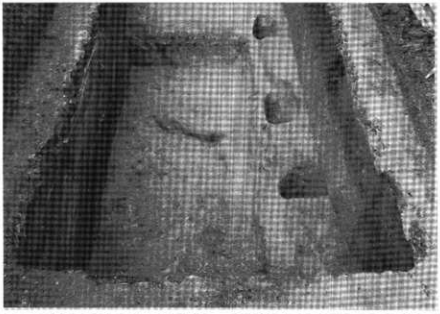
〈まとめ〉

先に述べたように、今回の調査地は、前期難波宮「朱雀門」の南西、後期難波宮朝堂院の南西に位置する。地山面の遺存状況はよかったが、古代以前に遡る遺構は検出しなかった。このことから、調査地周辺は、難波宮期の建物が存在しない個所であった可能性が高い。今後、周辺の調査によって、難波宮朝堂院の南西部の状況がさらに明らかになっていくものと思われる。

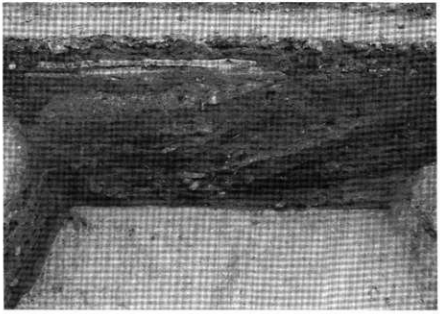
調査区西部完掘状況
（東から）



SK01完掘状況
（東から）



SK01地層堆積状況
（北から）



大坂城跡発掘調査(ＯＳ03－20)報告書

・調査個所　大阪市中央区谷町２丁目43－１
・調査面積　28㎡
・調査期間　平成16年3月17日～平成16年3月25日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・市川創

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査区は豊臣氏大坂城跡の三ノ丸の内側に位置する(図１)。周辺の調査では、弥生時代後期以降の各時期の遺構が検出されているが、古代には難波宮の北西、そして豊臣期以降は大坂城の西側という位置条件から、特に古代および豊臣期以降の遺物・遺構の分布は濃密である。

建設工事に先立って行われた試掘調査(OS03－19)において、豊臣期以降と思われる整地層が良好に遺存することが確認され、その上面には遺構の存在が予想されたため、発掘調査を行うこととなった。調査区は、建物の建設予定地に東西８m、南北3.5mの範囲に設定した(図２)。３月17日に重機を使用して後述の第１層を除去し、その後第２層を人力で掘削した後、第３層は再び重機で掘削を行った。それ以降、第４層以下は地山(第６層)までを人力で掘削した。途中２日間の降雨に見舞われたが、３月25日には埋戻しを含むすべての作業を完了した。

なお、本報告で使用する方位は座標北であり、座標値は世界測地系を用いる。座標値の算定は、縮尺500分の１の大阪市道路現況平面図に、平板測量で作成した縮尺100分の１の調査区周辺図を対応

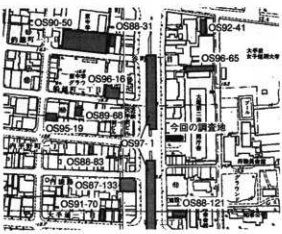


図１　調査地周辺図(１：5,000)

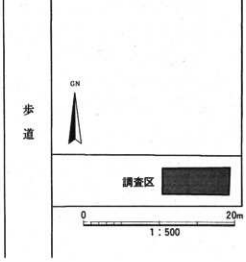


図２　調査区配置図

させることで行った。従って、正確な測量に基づく数値ではないことを断っておく。また、水準はTP値である。

〈調査の結果〉

1．層序(図3)

調査地の現地表の標高は約15.5mである。調査区の北半では、地山(第6層)より地表まで、豊臣期以降の各時期にわたる整地層が良好な状態で認められ、6層に大別し、可能な部分は細分を行った。以下、各層の特徴を記述する。

第0層：近現代の整地および攪乱による地層である。層厚は最大で1.2mほどであった。

第1層：第6層に由来する粘土の偽礫を多く含む、固くしまった整地層である。層厚はもっとも残りのよい部分で約0.8mであった。整地の単位により、第1a層から第1c層に細分した。重機で掘削したため詳しい年代はわからないが、第2層との対比から少なくとも18世紀以降のものである。

第1a層：黒褐色を呈し、炭を含む砂礫層である。

第1b層：灰オリーブ色～暗灰黄色を呈する砂礫層である。断面観察により、土壙状の遺構SK101・102が認められた。SK101は砂礫を含むシルト、SK102はシルトを含む砂礫を埋土とし、いずれも埋土には炭を含む。

第1c層：黄褐色～褐色を呈するシルト質砂礫層である。第1a層と同様に、第6層に由来する粘土の偽礫を含むが、炭および焼土を含む点が特徴的である。

第2層：黄灰色を呈し、シルトを含む砂礫からなる整地層である。層厚は約0.25mである。第1層とは異なり、粘土の偽礫をほとんど含まない。整地の単位によって2層に細分したが、層相はほぼ等しい。遺物の下限年代から、18世紀の整地層と考えられる。第2a層の下面遺構としてSK201～203がある。SK201は黄灰色を呈し砂礫を含む粘土を埋土とする。SK202は黄灰色を呈しシルトを含む砂礫を埋土とする。SK203は、黄灰色～灰黄褐色を呈しシルトを含む砂礫を埋土とし、炭を含む。なお、調査区の南半はこの第2層中から掘削された大規模な土壙が第6層まで及んでいた。

第3層：固くしまった砂礫からなる整地層である。層厚は約0.3mである。色調は灰オリーブ色を呈する。層中には第6層に由来する粘土の偽礫が多く含まれる。第3層についても重機で掘削を行ったため、詳細な時期は決定しがたいが、初期の肥前磁器が出土していること、および第2層が18世紀の整地層であることから、17世紀の整地層と考えられる。

第4層：後述するSB501が廃絶した後の整地層であり、層厚は厚い部分で約0.2mである。2層に細分した。

第4a層：灰オリーブ色を呈する砂礫層であり、シルトを含む。比較的固くしまり、粒径も揃っている。遺物は出土しなかったため、時期は明確ではない。

第4b層：暗オリーブ灰色を呈する砂礫層であり、シルトを含む。多量の水分を含んでしまりは著

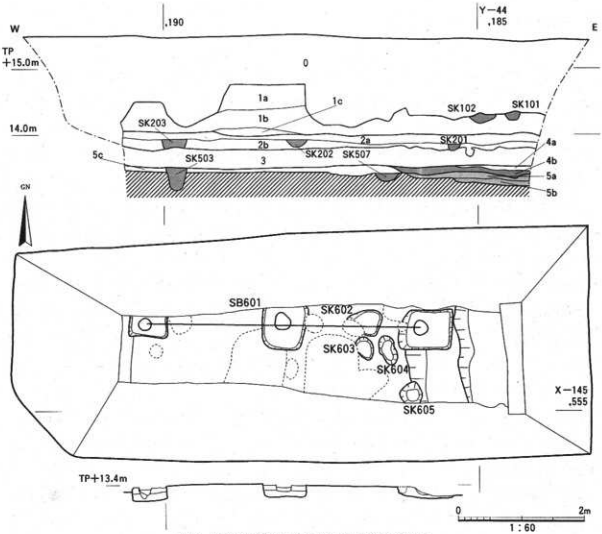


図3　調査地北壁断面および地山上面検出の遺構

しく悪く、有機分に富む。遺物を多く含んでおり、豊臣前期に位置付けられる土器・陶磁器類(図5)や木製品・銭貨・獣骨などが出土した。

第5層：第6層直上の整地層であり、層厚は約0.15mである。3層に細分した。

第5a層：灰色を呈する砂礫層である。

第5b層：第6層が1段低くなる調査区東端にのみ存在する。暗オリーブ灰色を呈する砂礫とシルトが互層になっており、さらに細分が可能である。第5a・b層ともに礎石建物SB501に伴う整地層であると考えられるが、層界は明確であるため、両層の形成時期は若干異なる可能性がある。

第5c層：灰色を呈する砂礫層である。調査区の西半、第6層が高く残る部分に分布している。層相の類似や堆積の状況などから、第5a層と同時期のものである可能性がある。

第6層：オリーブ灰色～灰オリーブ色を呈する粘土層であり、本調査区の地山である。標高は高い部分で13.4mであった。検出後、時間の経過とともに酸化して、黄色味を帯びた色調へと変化した。また、上部には乾痕が認められた。

2．遺構と遺物

i)遺構

a．第6層上面検出遺構(図3)

SB601　第6層上面で検出した掘立柱建物である。3基の柱穴が検出されたが、本来の建物の規模は不明である。柱筋の方位はほぼ東西方向であるが、東側がわずかに南に振れる。柱間寸法は約2.2mである。3基の柱穴はいずれも平面方形の掘形をもつが、それぞれ規模が異なり、西端のものが一辺0.55m、中央のものが0.68mである。東端のものは東西方向に長い不整形な長方形を呈し、長辺は0.88m、短辺は0.6mである。柱痕跡の直径はいずれも約0.2mである。3基の柱穴に共通した特徴として、掘形を掘削した第6層の偽礫を一部そのまま埋戻し、柱痕跡が掘形の底面に接しないことが挙げられる。いずれの柱穴からも古代の土器が数点ずつ出土しているが、細片であるため詳細な時期を決定することはできない。

SK602～605　第6層上面で検出した土壙群である。いずれも第6層に由来する直径10cm程度の粘土偽礫を多く含む。掘削後すぐに埋戻したものと思われるが、性格は不明である。遺構検出時に1点のみ瓦器の細片が出土したが、埋土に包含される遺物は全て古代の土器であるため、古代にさかのぼる遺構としてよかろう。SB601と切合い関係はなく、両者の先後関係は不明である。

b．第5層検出遺構(図4)

SB501　第4層を除去した段階で検出された礎石建物である。1間分を検出し、礎石の間隔は0.9mである。ほぼ東西方向に礎石が並ぶが、若干東で南へ振れる。検出された礎石は2石のみであるが、整地層(第5層)の範囲を考えれば、建物の東北隅に当たるものであろう。この2石以外にも、小振りな3石が検出された。これらも上面は平坦であったが、両者の関係は不明である。また、調査区東端で杭が検出された。第5a層上面から打ち込まれており、SB501に伴うと考えられる。SB501の時期は、礎石を覆う第4b層から出土した陶磁器によって豊臣前期と考える。

SK502～507　第5c層の上面、あるいは層内で検出された土壙である。いずれも出土遺物は乏しいが、層位的な状況から16世紀後葉～17世紀前半代の遺構と考えてよかろう。

ii)遺物(図5)

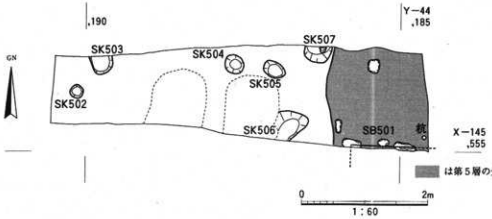


図4　第5層下面検出遺構

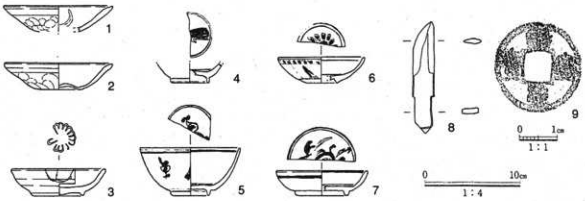


図5　第4b層出土遺物

1～9はすべてSB501の礎石を覆う第4b層から出土した遺物である。なお、陶磁器の分類および年代観については[森毅1992]に従った。

1・2は土師器皿である。1の口縁部分は残存率が悪く、かつ歪みが激しいが、口径11.5cmほどになろう。内面は全面にナデ調整を施し、外面も口縁部はナデ調整で仕上げるが、口縁部以外ではユビオサエの痕跡を残す。調整の最後に施された内面底部から口縁部へのナデ上げが特徴的である。2は口縁部を一部欠損する以外は完形に復元することができた。口径は11.4cm、器高は2.7cmである。底部は上方へ持ち上がっており、いわゆるへそ皿である。内面底部には一定方向のナデを施し、底部以外の内面および口縁部の外面はヨコナデで調整する。口縁部以外の外面ではナデ調整が施されず、ユビオサエの痕跡を留める。1・2ともに煤の付着が著しく、灯明皿として使用されたものと思われる。

3は瀬戸美濃焼の灰釉丸皿B類である。口径は9.8cm、器高は2.8cmである。低い高台を有し、体部から口縁部にかけてゆるく内湾している。灰釉はもともとは全面に施されていたものと思われるが、重ね焼きのためか高台端面は欠損し、この部分だけ露胎となっている。内面底部には印花文が施され、また、高台内側にはトチンの痕跡を輪状に残す。その他、口縁部には漆継ぎの痕跡が残る。二次的な被熱によって外面底部付近の釉は荒れている。

4～7は青花である。4は饅頭心となる碗Ⅰ類であり、高台径は3.8cmである。高台端面は釉剥ぎを行っている。内面見込には昆虫と思われる模様を描く。高台内側には字款を有するが、残存部分が少なく判読できない。5は饅頭心風の碗であるが、底部の持ち上がりはごくわずかである。口径は10.5cm、器高は5cmである。内面見込および外面体部に模様を描く。高台端部は露胎とし、砂が付着する。また、高台内側には金属様の物質が付着する。6は磁器質で蛇籠底の皿Ⅰa類である。口径は9.1cm、器高は2.7cmである。外面底部は露胎であるが、胎土中の鉄分が発色したためか、この部分のみ橙色を呈する。外面体部には芭蕉葉文を、内面の見込み部分にはねじ花を描く。また、外面の底部付近には融着痕が認められる。7は陶胎で有高台の皿ⅢB類である。口径は9.6cm、器高は2.6cmである。厚い釉薬のため、体部は口縁部付近が肥厚して見える。内面見込みには太い筆致で花文を描く。

8は完形の刀子形木製品である。実測図を示した面はていねいな面取りによって刃の表現がなされ、滑らかに仕上げられているが、裏面の仕上げは粗い。

9は銅銭である。鋳上がりが悪いが、熙寧元寶(1068年初鋳)であろう。

図示することはできなかったが、第4b層からはこの他にも、墨書土器・箸・シカの大腿骨などが出土している。

これらの遺物の年代観であるが、鍔頭心で高台内側に字款をもつ碗Ⅰ類4など、古相を呈する遺物が出土している一方で、青磁・白磁は出土しておらず、皿Ⅲ類7が存在しているなど、新しい様相も示している。ただ、唐津焼が全く出土していないこと、碁笥底のⅠ類の皿6が出土していることなどからは、豊臣後期に下る可能性は低い。したがって、第4b層出土遺物の年代観は豊臣前期に位置づけられ、SB501もこの時期の遺構と考えられる。

〈まとめ〉

今回の調査では、小規模な調査ながら、古代および豊臣前期の2時期の建物跡を検出できたことは、大きな成果といえる。ただ、成果と同時に、多くの課題をも提起した。

まず古代の掘立柱建物については、詳細な時期が決定できなかったこと、そして規模を明らかにできなかったことが課題として挙げられる。参考として、今回の調査地の西隣、谷町筋で行われたOS97−1次調査の成果を簡単に紹介しておく。この調査では、今回検出されたものとほぼ同じ規模の掘形と柱間隔を有する複数の掘立柱建物が検出されており、平城宮土器Ⅲに相当する遺物が出土しているため、奈良時代中頃以降のものと考えている[大阪市文化財協会1999]。

豊臣前期の礎石建物については、やはり建物の規模を決定できなかったことが課題として挙げられる。該期における当調査区は、細かな町割りが施工された現在の谷町筋よりも西側の地域とは異なり、広大な敷地を有する武家屋敷が展開する地域であった可能性が指摘されている[松尾信裕2003]。その中で今回検出された礎石建物がどのように位置づけられうるのか、周辺調査のより一層の蓄積が必要であろう。

今回調査を行った谷町筋よりも東側の地域には、官公庁の敷地が広がっており、大坂城跡とされる範囲の中で、大規模な調査が行われうる反面、空白地帯も大きいという特徴がある。そのような中で今回は、その空白地帯の一角で調査が行われたわけであるが、調査面積に比して大きな成果が得られたのは前述の通りであり、当地が古代以来の遺構が残存する重要地域であることを再確認することとなった。課題も多く残されたが、今後の周辺調査の成果を待ちたい。

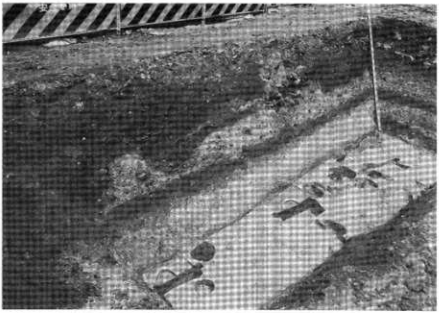
〈参考文献〉

大阪市文化財協会1999、『大坂城跡』Ⅳ

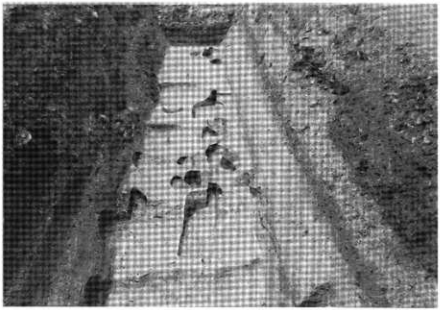
松尾信裕2003、「豊臣氏大坂城惣構の町割」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.325−338

森毅1992、「豊臣氏大坂城期の遺構と遺物」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.131− 136

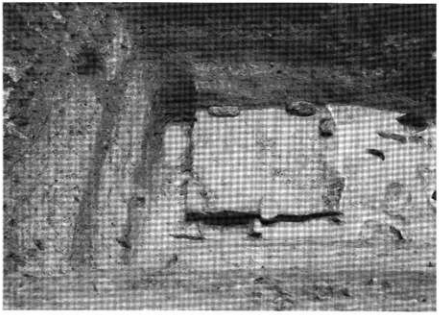
北壁地層断面
（西南から）



第６層上面検出
SB601
（東から）



第５層上面検出況
SB501
（北から）



西心斎橋１丁目所在遺跡発掘調査（ＮＢ03－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区西心斎橋１丁目33
・調 査 面 積　64㎡
・調 査 期 間　平成16年３月８日～平成16年３月31日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・平田洋司

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地の西側に位置する。調査地の東にある三津寺町は、古代難波津の有力な所在地の一つとされている。周辺での本格的な調査例はないが、東の東心斎橋１丁目所在遺跡では江戸時代、南の難波貝層遺跡では中世の遺構・遺物がそれぞれ見つかっている。今回の敷地でも事前に行われた試掘調査の結果、近世以前に遡る地層および遺物が確認されたため、敷地南西部で調査を行うこととなった。

重機による掘削は後述の第８層までとし、以下はすべて人力による掘削で進めた。また、調査の深度は基礎の及ぶ現地表下2.5ｍを超えないようにした。

なお、調査に用いた方位は磁北で、レベルはTP値である。

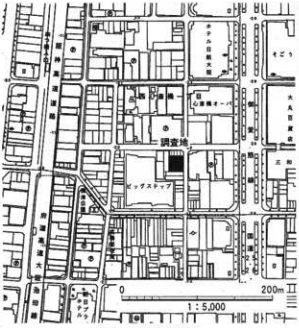


図１　調査地位置図

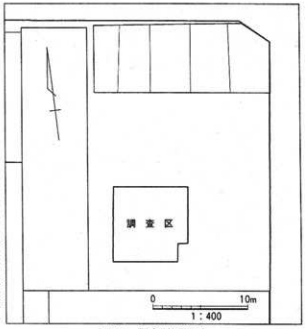


図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

1．層序

第1層　表土層および攪乱で、平均層厚は10cmある。

第2層　焼土層および焼土を多く含む整地層であり、平均層厚は10cmある。近現代に位置づけられる。

第3層　生活面を伴う複数の整地層薄層からなり、途中には焼土も認められる。平均層厚は40cmある。江戸時代後半に位置づけられると思われる。

第4層　にぶい黄褐色中粒砂からなる整地層で、層厚は10～20cmある。

第5層　炭・粘土偽礫を含むオリーブ褐色シルト質中粒砂からなり、層厚は10cmある。江戸時代後半に位置づけられる。

第6層　にぶい黄褐色中粒砂や粘土偽礫を含むオリーブ褐色中粒砂などからなる厚い整地層で、層厚は40～50cmある。

第7層　炭を多く含む暗灰黄色シルト質中粒砂からなり、層厚は10cm程度ある。江戸時代中期に位置づけられると思われる。

第8層　黄褐色中粒砂および粘土偽礫を多く含む灰黄色中粒砂などからなる整地層で、層厚は10～30cmある。

第9層　炭を多く含む暗灰黄色シルト質中粒砂からなり、層厚は10～15cmある。17世紀後半の陶磁器類を多く含む。

第10層　にぶい黄色中粒砂からなる整地層で、層厚は10～15cmある。

第11層　炭を含む褐色細～中粒砂からなり、層厚は20cmある。瓦器片のほか17世紀後半の陶磁器類を含む。耕作の痕跡は認められなかったが、下層との境が比較的明瞭であり、畠の作土であった可能性もある。

第12層　細礫を含む黄褐色細～中粒砂からなり、層厚は10～15cmある。第13層が植物などにより

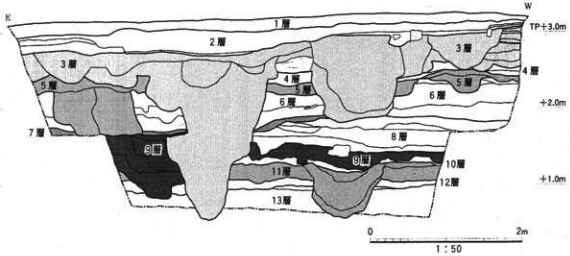


図3　南壁断面図

擾乱を受けたものであり、堆積構造が乱れている。砂浜の堆積層と考えられる。13～14世紀代の瓦器片をごく少量含む。

第13層　明黄褐色細～中粒砂、黄褐色粗粒砂～細礫の互層からなる水成層で、層厚は100cm以上ある。満潮時には海中、干潮時には陸上となる前浜の堆積層と考えられる。上部から30～40cmについて調査地全域で掘削したところ土師器・須恵器片が数点出土した。古墳時代後期以降と考えられるが、いずれも磨滅が著しく、詳細な時期は不明である。

2．遺構と遺物

a)第11層地層内・第12層上面検出遺構

遺構の多くは第12層まで掘り下げた時点で確認した。以下おもなものについてその概要を記す。

SK1101　調査地北西部で検出した。直径1.3mの平面円形で、深さは0.6mある。埋土は褐色シルト質中粒砂である。土師器皿1、羽釜10、瓦器椀2～6などが出土した。14世紀前半に位置づけられる。

SK1102　調査地南東部で検出した。長さ1.0m以上、深さ0.35mあるが、調査区外に続くため正確な形状・規模は不明である。埋土は3層に大きく区分でき、下層は12層の偽礫を多く含む遺構掘削時の再堆積土、中層は炭・焼土粒を多く含む機能時の堆積層、上層は人為的な埋戻し土である。瓦器椀7・8、須恵器鉢9、甕11などのほか、焼壁片が出土した。14世紀前半に位置づけられる。

SK1103　調査地南部で検出した。平面形は長軸2.0m、短軸1.2mの楕円形で、深さは0.55mある。第11層の最上部付近から掘込まれている。埋土は2層に大きく区分でき、下層は炭を多く含む機能時

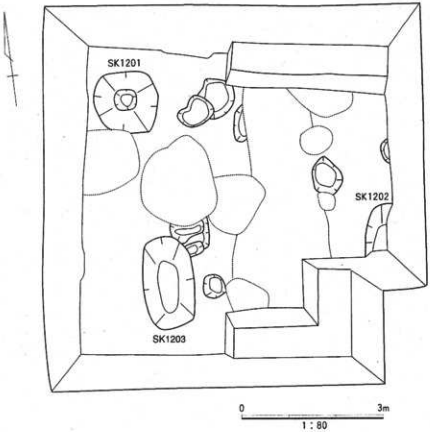


図4　第11層地層内・第12層上面検出遺構

の堆積層、上層は人為的な埋戻し土である。なお、埋土の圧縮による陥没のためか、第10層の整地時にも窪みとして残されていた。出土遺物には土師器皿、瓦質土器鉢、肥前系磁器椀などがあり、17世紀後半に位置づけられる。

他の遺構はいずれも小規模なものであり、時期の決定できる遺物も出土していない。

b）第10層上面検出遺構

第11層上に整地がなされた後に、築かれた遺構群である。出土遺物から17世紀後半に位置づけられる。以下、おもなものについて記す。

SD1001　調査地やや東よりで検出した南北方向の溝である。溝の東西で遺構面の標高が約20cm異なることから敷地境の溝と考えられる。幾度もの掘返しが認められ、検出時には東側に1段の石組み、西側には板の痕跡が残されていた。調査地南端では、西側にも一部石組が遺存しており、構築時には両側に石組みがあったものと考えられる。また、下位には同じ位置で掘立柱の柵SA1001が認められたことから柵から溝へと敷地境が変更された可能性がある。

溝内からは土師器12～14・31、備前焼15、瓦質土器、瀬戸美濃焼16・17、唐津焼32・33、肥前系磁器18～30、中国製磁器、瓦など多くの遺物が出土した。また、魚類を中心として動物遺体も多く出土している。

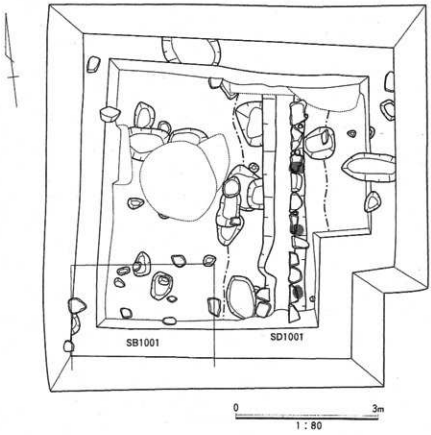


図5　第10層上面検出遺構

（破線はSD1001掘削当初のライン、トーンはSA1001を示す）

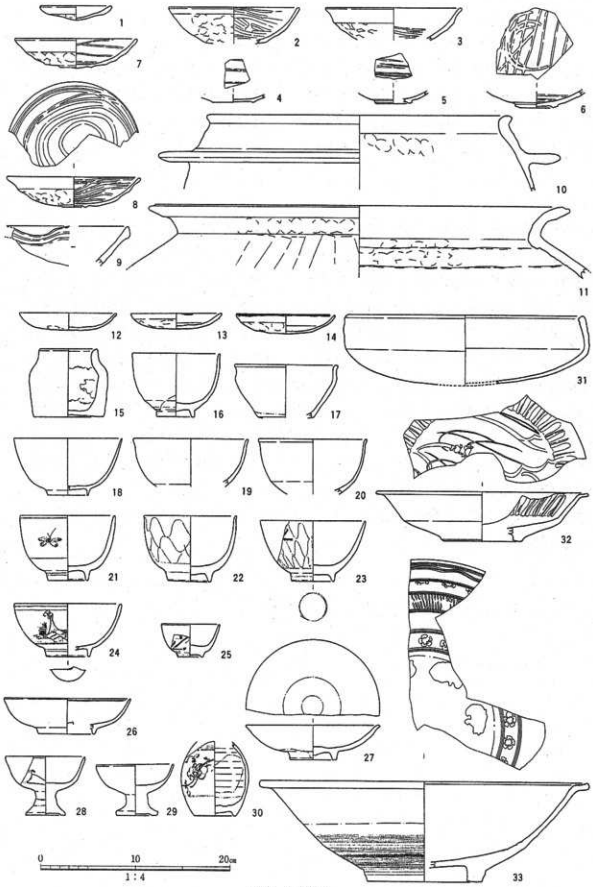


図6　出土遺物

(1～6・10：SK1101、7～9・11：SK1102、12～33：SD1001)

SB1001　SD1001より西側では礎石と考えられる石が点在していた。このうち、調査地南側で比較的まとまったものを礎石建物として復元した。東西３間(2.7m)、南北２間(1.8m)以上を確認した。なお、調査面積が小さいため、異なる組合わせである可能性もある。

土壙群　調査地の全域で多くの土壙を検出した。平面は円形あるいは楕円形を呈するものが多く、規模は直径0.3～1.0m、深さ0.1～0.5mとバラツキがある。土壙のうち比較的深く大型のものはSD1001に沿って分布している。これらの土壙は、土器類のほか炭、動物遺体が多く含まれること、建物外部に位置することから、機能としてはゴミ穴と思われる。

<まとめ>

今回の調査は小規模なものであったが、調査地および周辺の変遷を考えるうえで大きな成果をあげることができた。以下、その概要を記してまとめとする。

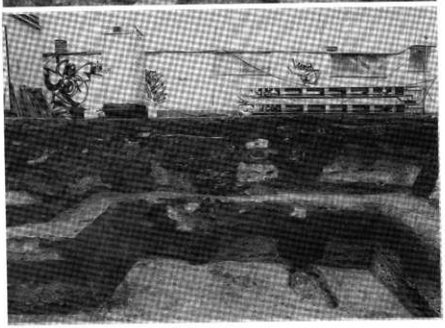
調査地周辺は海から徐々に陸化し、砂浜となっていった。出土遺物からみる限り、完全に陸化するのは13～14世紀であるが、さらに遡る余地は十分ある。その後、14世紀前半には遺物のほか土壙など遺構も認められることから、人々の生活の場となったといえよう。17世紀後半までは、顕著な遺構面の変化はなく遺物量も少ないことから、居住の場として絶えず利用されていたとはいい難い。ただし、耕作地としての利用は考えられる。17世紀後半の整地以後はこの状況は一変する。この際の整地は調査地を越えて一帯に拡がるものであり、敷地境と考えられる施設も築かれる。町としての開発・整備が行われたのはこの時期であろう。その後は、幾度もの整地を繰返して現代に至っている。これらの整地には厚さが50cmもある大規模なものもある。堀の整備など大規模な工事に伴って行われた整地の可能性もあり、文献との対比ができるかもしれない。

当遺跡における調査は今回が端緒に過ぎない。今後の調査の進展により、こうした変遷はより具体的になると期待できよう。

調査地全景
（北から）

東壁断面
（西から）

南壁断面
（北から）



II 天 王 寺 区

大坂城跡発掘調査(ＯＳ03－７)報告書

・調査個所　大阪市天王寺区清水谷町18－14(８－18)
・調査面積　約74㎡
・調査期間　平成15年６月23日～平成15年６月27日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・李陽浩

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は長堀通りの南側に位置し、難波宮中軸線から西に約150mのところにある。周辺では数次の調査が行われており、難波宮造営以前の集落跡を示す古代の住居跡や溝・土壙、難波宮期に相当する遺構群が見つかっている(図１)。

この度、標題の建設工事が行われることになり、平成15年２月27日に試掘調査を行ったところ、地山が高く、かつ地山上面において溝状の遺構を検出したため、本調査を行うこととなった。

調査では試掘結果に基づいて地山直上までの地層を重機で除去し、その後人力によって掘削を行った。遺構はすべて地山上面で検出し、適宜図面・写真などの記録作業を行った。埋め戻しを含む発掘調査に係るすべての作業は６月27日に終了した。

なお、本報告で用いた方位は磁北で、標高はT.P.値である。

図１　調査地位置図

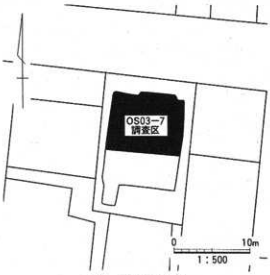


図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

１．層序

本調査地では地山直上まで近・現代の地層が及んでおり、古代～近世の堆積層を確認することができなかった。よって遺構はすべて地山上面で検出した。

なお、調査地全面において地山は高く、現地表下約

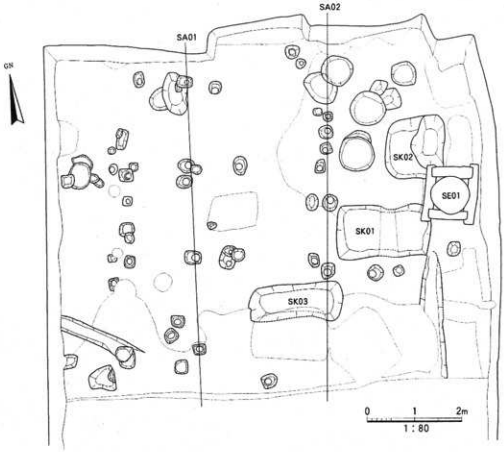


図3　地山上面遺構配置図

0.3m(TP+20.2m)で検出された。

2．遺構と遺物(図2～3)

検出した遺構は柱穴・土壙・井戸・ピットなどである。井戸を除いたいずれの遺構も埋土に遺物があまり含まれず、すべて地山上面で検出したため正確な年代を知ることが困難である。以下の記述ではおおよその年代観を示すに留める。検出した遺構はすべて近世のものである。柵SA01・02、土壙SK01～03などがある(図3)。SA01は調査地を南北に走る塀である。柱穴は隅丸方形で、長さ約0.3m、幅約0.25m、深さ0.35mである。柱間は1.8～1.95mである。埋土は炭・偽礫やオリーブ褐色のシルトを含む中粒砂である。SA02はSA01とほぼ平行する南北方向の柵で、柱穴の大きさは幾分小さく、深さもない。柱間は約1.5mである。SK01～03はいずれも隅丸方形で、SK02のみ正方形に近い。埋土はすべて炭・偽礫やオリーブ褐色のシルトを含む粗粒砂である。江戸後期から幕末にかけての遺物が出土した。また、ピットはすべて小規模なもので、杭などの可能性もある。井戸SE01は瓦製井戸側の外に長方形の石を井桁に組むもので、幕末から近代に埋められたものと思われる。

〈まとめ〉

今回の調査では古代の遺構を検出できなかったが、この場所に地山が高く遺存していることを確認することができた。周辺における調査成果を見ると、本調査地は西から東へと下る緩斜面上に位置し、

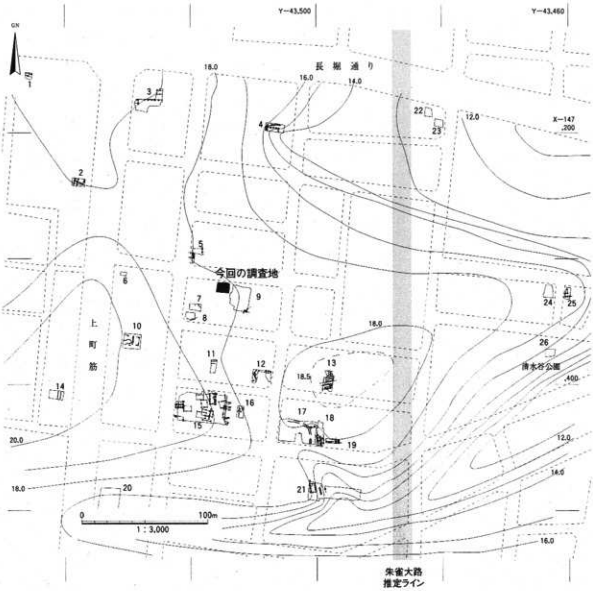
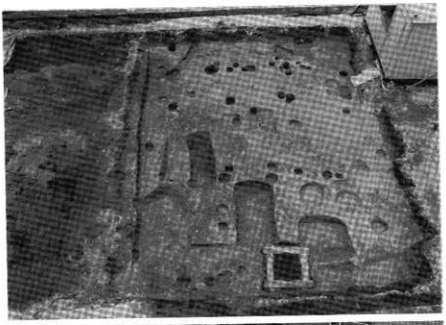


図４　清水谷周辺の古代遺構配置図（大阪市文化財協会2002,『大坂城跡Ⅵ』、図213に加筆修正）

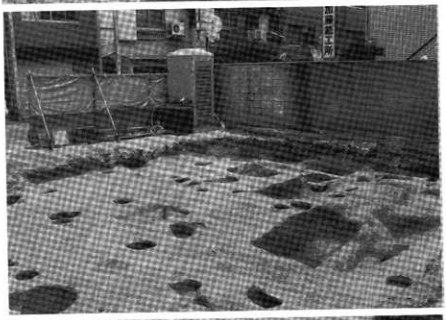
南側には古代の集落が存在している（図４）。本調査地では古代の住居跡が検出されていないが、南側および北側では柱穴が見つかっていることから、ここは建物間の空閑地である可能性が考えられよう。

なお、本調査地が位置する清水谷一帯では多くの住居跡が見つかっているが、それらの具体的な範囲や分布は十分には明らかにはなっていない。そうした状況を考えた場合、今回の調査は古代における集落の分布範囲を知るうえで重要であり、さらに検討を重ねるためにも付近での調査成果の蓄積が望まれる。

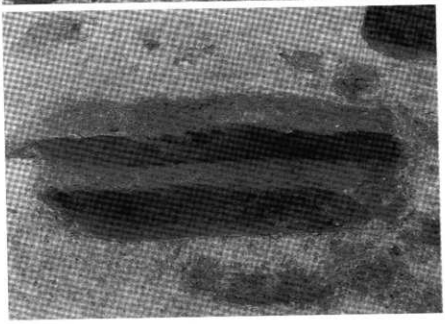
調査地全景
（東から）



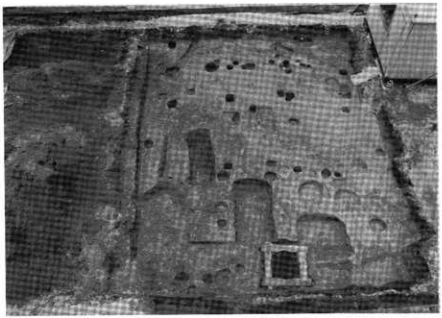
地山上面完掘状況
（西南から）



土壙SK03
（南から）

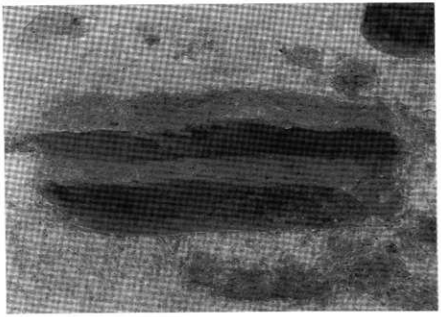


調査地全景
（東から）



地山上面完掘状況
（西南から）

土壙SK03
（南から）



摂津国分寺跡発掘調査(ＳＫ03－２)報告書

・調査個所　大阪市天王寺区国分町15番地
・調査面積　86㎡
・調査期間　平成15年８月１日～平成15年８月11日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・積山洋・小倉徹也

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は奈良時代に建立された摂津国分寺の推定地に当り、現天徳山国分寺の南西約100mにある。本遺跡ではこれまでに５個所で発掘調査が行われており、本調査地はその南西部に位置する(図１)。これまでの調査では、古代～中世の遺構、古代の瓦などの遺物は出土しているが、未だ摂津国分寺に直接関わる遺構は見つかっていない。

平成15年7月22日に試掘調査(SK03－1次)を行った結果、中世の遺物を含む土壙が確認された。この結果を受け、平成15年8月1日から発掘調査を実施することになった(図２)。

調査はまず、重機によって現代盛土および近世の地層を除去した後、以下を人力によって掘下げた。その結果、近世に属する遺構と中世以前と考えられる土壙が見つかった。平成15年8月11日に器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

なお、図面に示す標高はＴＰ値、方位は図１が座標北、それ以外は磁北である。

図１　調査地位置図

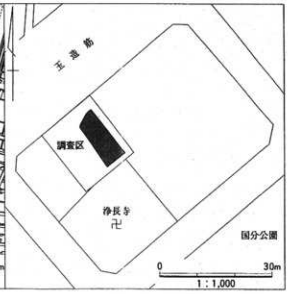


図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

1．層序

現地表面下約1.9mまでの地層を観察した。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴を表1に示す。なお、基本的な層序の確立は最も地層の残りが良かった調査区南西の壁面で行った(図3)。

第0層は現代の盛土層で、0a層～0c層に細分される。第0a層は調査前の建物解体後に運び込まれた盛土層である。第0b層は黒褐色粗～中粒砂からなる盛土層で、赤褐色ないし褐色の焼土塊を含む。調査区北西側では本層下部に第2次大戦の戦災に由来する赤褐色焼土層が観察された。第0c層は黄灰色シルト混り細粒砂、細礫～粗粒砂を含む黒灰色ないし暗灰色中～細粒砂、シルトを含む淡褐灰色細粒砂、黄灰色細粒砂混り中粒砂などのブロックからなる盛土層である。盛土の層厚は、調査区北西側で平均層厚0.35m、南東側で0.60mと南東側に厚くなっており、これは後述するSX01を境にした段差があったためである。

第1層は灰色を呈するシルト質細粒砂・シルトを含む細粒砂・細粒砂ないしシルトを含む褐灰色細粒砂からなる盛土層である。本層上面の高さは、後述するSX01を境にして調査区北西側が高く、南東側が低くなっている。高い北西側には、灰色細粒砂とその上位に灰色シルト質細粒砂～シルト混り細粒砂および灰白色シルト混り中～粗粒砂の薄い盛土がなされている。この上面は堅く締まっており、上位層とは明瞭な層理面で接していることから、以前の地表面と考えられる。本層からはコンニャク印判の見られる肥前磁器が出土しており、18世紀に属すると考えられる。

第2層は中位段丘構成層で、2a・2b層に細分される。第2a層は黄灰色シルト混り中～細粒砂からなり、北西側の高い部分にのみ分布する。南東側では上位の第1層による削剥を受けているため分布しない。第2b層はシルトを含む黄灰色ないし黄白色中粒砂、黄灰色ないし黄橙色細～細粒砂からなる。本層下半部（TP＋7m以深）は、甲殻類のものと考えられる巣穴の化石が観察される海成層である。

表1　層序表

SK03-2層序			岩相	土色	層厚(cm)	自然現象ほか	遺構	時代
砂丘層	上部層	第0層 (a～c)	現代盛土（合焼土）	―	ab.165		←田地表面	現代
		第1層	灰色シルト質細粒砂～含シルト灰色細粒砂、灰色細粒砂／含シルト褐灰色細粒砂（盛土層）	2.5Y 4/5 5Y 3/1	av.30 (≦65)		←SK01～07、SP01～28、SE01～02、SX01	近世
中位段丘構成層		第2層 a	黄灰色 シルト混り中～細粒砂（北西側にのみ分布）	2.5Y 5/3	ab.30			更新世
		第2層 b	含シルト 黄灰・黄白色 中粒砂～黄灰・黄橙色 細～細粒砂	7.5Y 5/8 2.5Y 5/6 10YR 5/8	85≦	下半部に風化化石が観察		

2．遺構と遺物

平面的な調査は第1層基底面で行った。

第1層基底面検出遺構(図3・表2)

第1層基底面では土壙SK01～07、井戸SE01～02、ピットSP01～28、SX01を検出した。

土壙SK01～06、井戸SE01～02、ピットSP01～28は、出土した肥前磁器から近世の遺構であった。

SX01は南北方向の溝状の遺構である。残存する幅は約1.8mである。SX01を境に段差を生じてお

り、東側が約0.35m低くなっていた。区画の境を示すものと考えられる。SX01からは18世紀に属する肥前陶器・肥前磁器などに混じって、凸面に縄タタキ、凹面に布目が見られる厚手の古代の瓦(図4)が出土した。

土壙SK07は調査区南端部で検出した遺構である。遺構の大半が調査範囲外であるため、形や大き

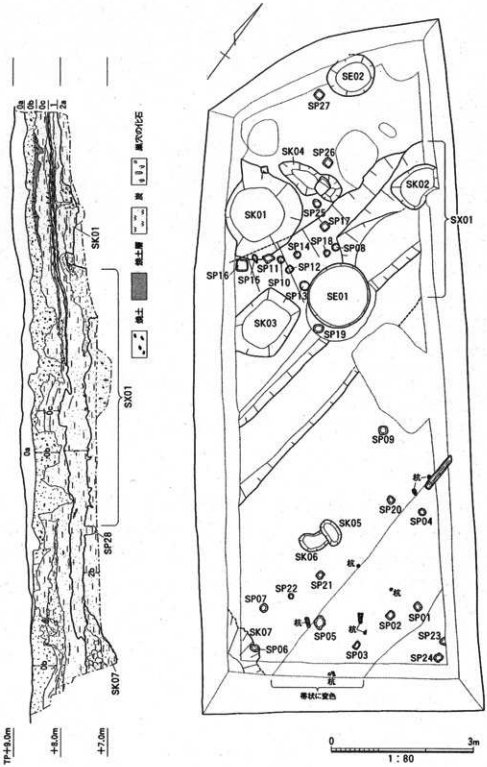


図3　第1層基底面遺構平面図および南西壁断面図

表2　第1層基底面遺構一覧表

遺構番号	南北長	北西－南東長	東西長	北東－南西長	深さ
SK01	1.68		1.60		0.59
SK02	0.93		0.61		0.51
SK03	1.57		1.19		0.56
SK04	0.52		1.36		0.19
SK05	0.40		0.60		0.21
SK06	0.49				0.14
SK07		(1.32)		(0.77)	0.65
SE01	1.28		1.28		(0.55)
SE02	0.97		0.83		(0.95)

遺構番号	南北長	北西－南東長	東西長	北東－南西長	深さ
SP01	0.16		0.15		0.23
SP02	0.20		0.16		0.17
SP03	0.20		0.15		0.19
SP04	0.14		0.15		0.09
SP05	0.24		0.20		0.21
SP06	0.16		0.20		0.13
SP07	0.15		0.16		0.22
SP08	0.13		0.13		0.33
SP09		0.18		0.17	0.24
SP10	0.13		0.14		0.23
SP11	0.18		0.15		0.16
SP12	0.15		0.15		0.21
SP13	0.17		0.18		0.12
SP14	0.14		0.14		0.15

遺構番号	南北長	北西－南東長	東西長	北東－南西長	深さ
SP15		0.20		0.13	0.24
SP16		0.19		0.19	
SP17	0.16		0.14		0.17
SP18		0.18		0.15	0.08
SP19		0.23		0.20	0.07
SP20	0.16		0.15		0.29
SP21	0.18		0.17		0.24
SP22	0.15		0.14		0.10
SP23		(0.15)		(0.11)	(0.11)
SP24	0.16		0.17		0.27
SP25	0.16		0.21		0.14
SP26	0.14		0.15		0.12
SP27	0.17		0.16		0.16
SP28		(0.18)		(0.25)	

単位：m
（）：残存値を示す。

さは不明であるが、残存する深さは約0.65mであった。埋土は上半部が第2層の偽礫を含む暗灰黄色シルト混り細～中粒砂、下半部が暗灰色シルト混り中～細粒砂ないしシルト質中～細粒砂からなる。SX01と同様の、凸面に縄タタキ、凹面に布目が見られる厚手の古代の瓦片が出土した。遺物がこの瓦片のみであるため正確な時期は決定できないが、埋土の層相を考慮すると中世以前、古代に属する可能性もある。

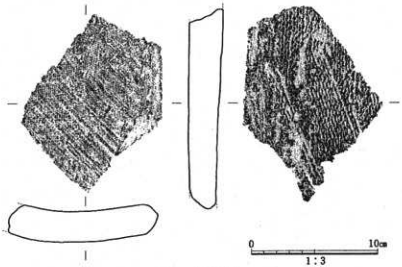
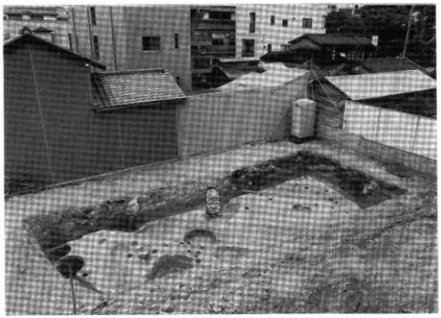


図4　出土遺物

〈まとめ〉

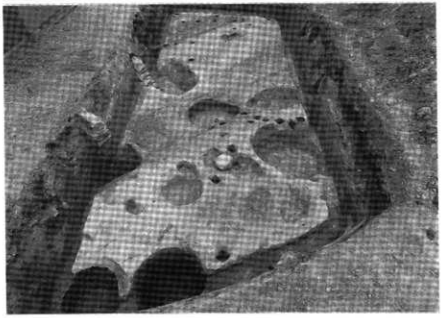
今回の調査では摂津国分寺の存在を直接裏付ける遺構は検出されなかったが、中世以前、古代の可能性もある土壙を検出した。また、時代は不明ではあるが、区画を示すと考えられる南北方向の段差を確認した。摂津国分寺跡の考古資料は決して多いとはいえないのが現状である。上町台地上に分布する周辺の遺跡群との関連性など、まだ不明な点が多い。今後行われる調査の結果を合わせて検討していくことが必要である。

調査地全景
（西から）



地層断面
（南西壁：東から）

第１層基底面遺構
検出状況（北から）



III　旭　　区

森小路遺跡発掘調査(ＭＳ03－５)報告書

・調査個所　大阪市旭区森小路中３－19－２(新森５－２－27)
・調査面積　約40㎡
・調査期間　平成15年９月16日～平成15年９月20日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は森小路遺跡のほぼ中心部に位置し、弥生～古墳時代の遺構や遺物の出土が見込まれる場所である(図１)。工事に先立つ試掘調査で、地表下約0.2mの深さで弥生土器を含む包含層が見られたため、関係者・大阪市教育委員会と協議の上、本調査を行うことになった。

調査は工事基礎が比較的深く入る敷地南半に調査区を設定した(図２)。平成15年９月16日に重機で近世以降の土を除去し、続いて以下の地層を人力により精査した。９月19日までの間に掘削・精査・写真撮影・記録等の調査に関わる作業を終え、翌20日にすべてを撤収して完了した。

なお、今回の調査では方位は磁北、標高はTP値を使用した。

図１　調査地周辺図

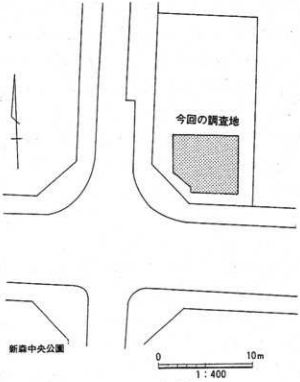


図２　調査の位置

〈調査の結果〉

1．層序(図3)

本調査の層序は以下のとおりである。

第0層：厚さが25cmほどの現代表土である。重機により除去した。

第1層：オリーブ褐色細砂混りシルトで、粒状の炭や焼土が混る。須恵器や弥生土器とともに陶磁器を包含する近世の客土層である。層厚は最大15cmである。重機で一部を除去した。

第2層：本層はおもに調査区東半部に見られた。黒褐色砂礫混りシルト質粘土で、鉄分を含み、粒状の炭や焼土が少し混る客土層である。出土した遺物の大半は須恵器・土師器・弥生土器であるが、破片ながら図5の白磁玉縁碗20や瓦器18・19が出土しているので、本層は中世の地層である。層厚は最大20cmである。

第3層：よくしまった暗灰黄～黒褐色極細粒砂混り粘土で、鉄分を含む。調査区南西部は削平されて第2層で埋まっていた。古墳時代中期の地層であるが、下位層にあったと推定される弥生時代の遺物を多く含んでいた。図5の弥生土器の甕8や壺の口縁部3、図6の打製石鏃21、磨製石庖丁24などがそれである。層厚は最大20cmである。遺構は本層の上面・層中・下面とも見られなかった。本層の時期を示す遺物は、図5に図示した須恵器の杯蓋11・12、杯身13～15、高杯16と、製塩土器17で、TK23を主体とする古墳時代中期のものである。

第4層：暗灰黄色細粒砂～シルトが主体の水成層で、調査区全面に堆積する。上部は炭粒や鉄分を含む黒褐色砂混り粘土質シルトである。本層上面で溝SD401を検出した。層中・下面には遺構は見られなかった。本層は調査区北半部で下位の第5・6層を削りこんでいるため、層厚が南半部で18cm、北半部で約40cmと、北半部が深く、厚くなっている。本層の時期を示す遺物は、図5に弥生土器の壺1・2・4・5、甕7と底部9・10を、また図6に打製石剣の破片22と磨製石包丁23・24を図示した。これらは弥生時代中期のもので、畿内弥生第Ⅲ・Ⅳ様式のものが多い。

第5層：ラミナの顕著なオリーブ褐～暗灰褐色細粒砂質シルトで、水成層である。炭粒が多く混る。第4層同様に北半部で第6層を削り込んで厚く堆積する。本層上面で溝とピットを、中央部より南部で検出した。北半部の遺構は、北半部が深く、厚くなっている第4層によって削平されてしまった可能性が高い。本層中や下面に遺構や遺物は見られなかった。

第6層：上から順に黒褐色粘土・黄灰色シルト質粘土・灰黄褐色細粒砂が、ほぼ水平に堆積する水成層である。本層はほとんど離水していないと考えられる。生痕は見られたが、遺構や遺物は見られなかった。

2．遺構と遺物

前項でも記したように、今回の調査では第3層と第4層の基底面で遺構を検出した。

(1)弥生時代の遺構(図3)

弥生時代の遺構は、第5層上面で見つかった多数のピット・土壙である。これらは深くても0.20m程度のものである。平面形が直径0.15m程度の円形の小さなものから、長径0.75cm、短径0.50cmほどの楕円形のものや不整形なものなど、さまざまである。また、SP505のように柱穴の下部とみられる

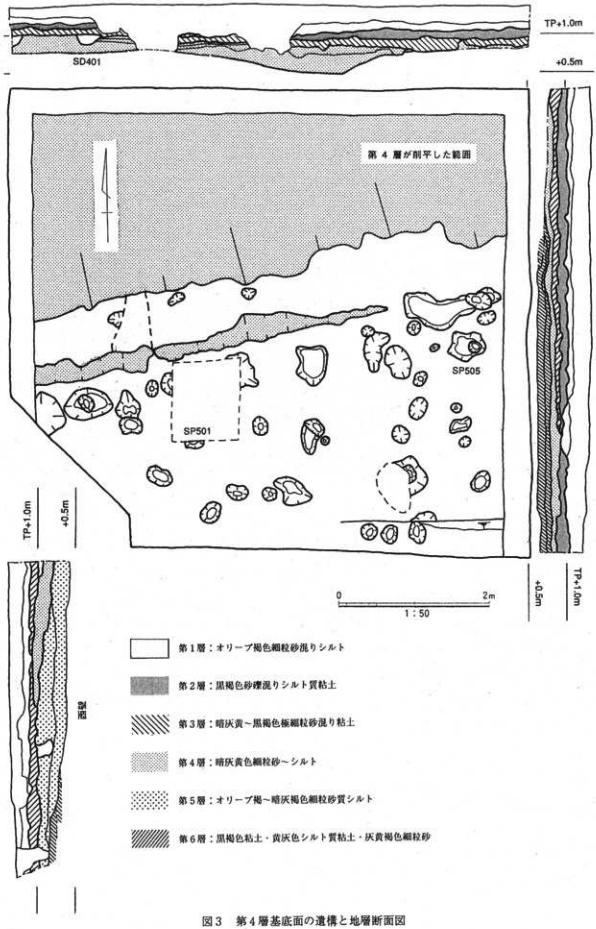


図３　第４層基底面の遺構と地層断面図

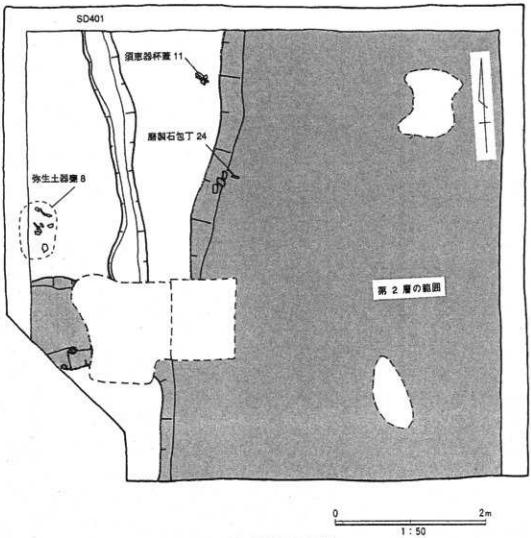


図4　第3層基底面の遺構

ものもある。しかし、ほとんどの遺構は第4層で少なからず削平を受けているとみられ、もとの規模や形状がよくわからないものが多い。いずれの遺構にも、こなれた状態の下位の第5・6層が入っていた(図版中段)。これらの遺構から弥生時代中期の遺物が出土したが、図化できるものはない。

(2)古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、調査区北西部の幅0.45m、深さ0.15mの、第3層基底面の溝SD401のみである。埋土は黒褐色細粒砂混り粘土質シルトで、第3層によく似る。遺物は弥生土器の甕6が出土しているが、埋土の状況から、古墳時代に降る可能性が高いものと思われる。

〈まとめ〉

今までの周辺調査の成果と同様に、今回の調査では中世および古墳時代中期と弥生時代中期の遺構・遺物を確認することができた。

その結果、試掘時の弥生土器の包含層は中世または近世の第1・2層で、古墳時代の第3層を含めた構成の地層に弥生時代中期の土器が多く混っている。これらの土器は、いずれもほとんど摩滅しておらず、破片も大きい。図5の第3層の下部で見つかった弥生土器甕8のように、完形品に近いもの

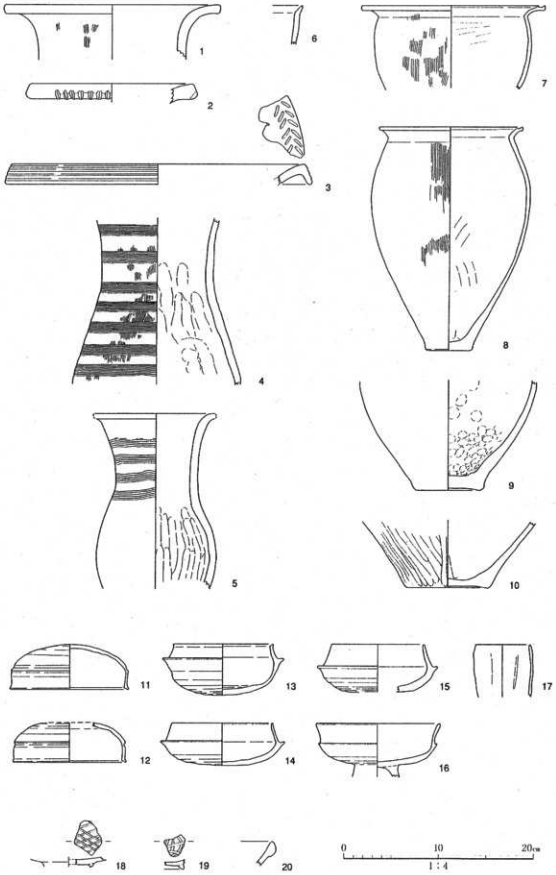


図5　出土した遺物(土器・磁器)

SD401(6)、第4層(1・4・5・7・9・10)、第3層(3・8・11～17)、第2層(18～20)

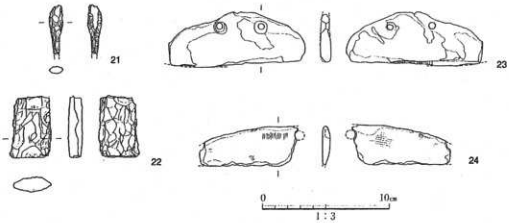


図6　出土した遺物(石器遺物)
第4層(22・23)、第3層(21・24)

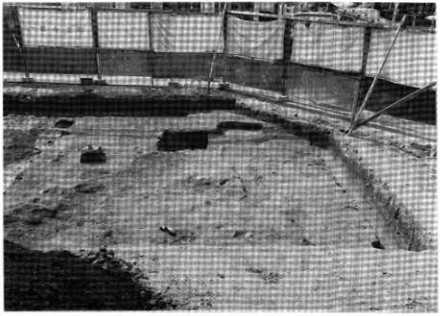
もある。これは土器が埋まった場所からあまり遠くへは動いていないことを示す。したがって、本調査地周辺には弥生時代中期の遺構が、本来はもっと密に存在していたと考えられる。

周辺の調査が進めば、古墳時代や弥生時代の生活様相がさらに明らかになっていくものと思われる。今後の成果に期待したい。

第５層上面の遺構
（北から）

第５層以下の水成層と
SP501（北から）

第４層上面の遺構
（北から）



Ⅳ 住　吉　区

山之内遺跡発掘調査(ＹＭ03－７)報告書

・調査個所　大阪市住吉区山之内３丁目65－３
・調査面積　30m²
・調査期間　平成15年11月13日～平成15年11月19日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・市川創

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査区は山之内遺跡の西地区に位置する(図１)。周辺の調査では、飛鳥時代を中心として古墳時代後期から古代にかけての遺構が多数確認されているほか、中世の鋳造関連遺物も確認されている。

建設工事に先立って行われたＹＭ03－６次調査において、中世のものと思われる遺構(後述の**SD501**)が確認されたため、発掘調査を行うこととなった。調査区は建物の建設予定地に東西4.2m、南北７mの範囲に設定した。11月13日に重機を使用して現代客土層を除去し、以下を人力で掘削、11月18日には調査を完了し、19日には埋戻しを含めすべての作業を終了した。

なお、本報告で使用する方位は磁北であり、水準はＴＰ値である。

図１　調査地周辺図(１：5,000)

1. ＹＭ86－３
2. ＹＭ90－５
3. ＹＭ81－６
4. ＹＭ97－６
5. ＹＭ88－21
6. ＹＭ81－３
7. ＹＭ90－29
8. ＹＭ93－33
9. ＹＭ95－８
10. **ＹＭ99－32**
11. **ＹＭ91－11**
12. ＹＭ85－40
13. ＹＭ83－41
14. ＹＭ01－13
15. ＹＭ86－23
16. ＹＭ82－45
17. ＹＭ87－12
18. ＹＭ89－15
19. ＹＭ90－19
20. ＹＭ87－９
21. ＹＭ91－17
22. ＹＭ92－４
23. ＹＭ82－30
24. ＹＭ88－36
25. ＹＭ83－33
26. ＹＭ86－60

※鋳造関係の遺物が報告されている調査次数は太字で示した。

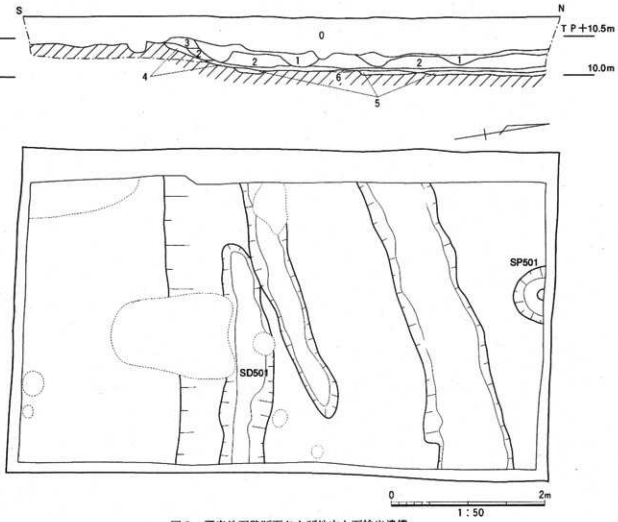


図２　調査地西壁断面および地山上面検出遺構

〈調査の結果〉

１．層序(図２)

調査地の現地表の標高はおおよそ10.8mである。現代盛土(第０層)に覆われるが、調査区の南半部分では地山の残りが良く、40cmほどの現代盛土を除去すると地山に達した。一方、北半部分は後述するように、近世以降に大きく削平されているが、地山に達するまでに４層が存在した。これらの各層には、古墳時代から現代までに至る各時代の遺物が包含されている。以下、各層の特徴について記述する。

第１～３層：褐色～黒褐色砂からなる現代作土層である。この作土層の層厚は最大で25cmである。第３層は第１・２層よりもシルトを多く含む。

第４層：砂を多く含む粘土質シルト層である。古代に遡る遺物を多く含むが、近世以降の遺物をも含むことから、削平後に形成された地層である。

第５層：褐色～黄褐色を呈する、砂混り粘土質シルトからなる。地山上面に掘り込まれたくぼみの埋土である。層相は地山に類似するが、やはり削平時に形成されたものであろう。

第６層：黄褐色の粘土層であり、本地区の地山である。

2．遺構と遺物

i)遺構(図2)

SD501　地山が大きく削平される斜面部分で検出された溝状の遺構である。埋土中からは、古墳時代後期や古代など様々な時代の土器のほか、鋳造関係の遺物も出土している。出土遺物の下限年代から、室町時代の遺構と考えられる。なお、水が流れた痕跡は認められない。

SP501　調査区の北端で検出された柱穴である。掘形は円形で、直径は70cm、柱痕跡は直径16cmである。埋土の状況から柱穴と判断したが、周囲にこれと組み合う柱穴は検出されなかった。遺物は出土していないが、周囲の調査成果から、古墳時代後期～古代に遡る可能性がある。

ii)遺物(図3)

1～3はSD501から、4は第2層から出土した遺物である。

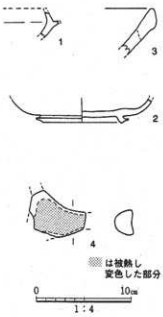


図3　出土遺物

1・2は須恵器杯身である。1は細片であり、かつ端部を欠損するが、TK43～TK209型式に属するものであろう。2はふんばった形状の高台を有する杯Bの底部である。腰の部分は歪んでおり、実際にはもう少しきつく立ち上がるものと思われる。7世紀後半代の遺物であろう。3は瓦質の擂鉢である。直径2mmほどの長石を胎土に多く含む。内面の擂り目は磨耗している。室町時代に属する遺物であろう。4は鋳型焼成用の支脚である。土製であり、明橙色を呈する粗い胎土を用いる。上面には砂が付着し、赤色に変色している。

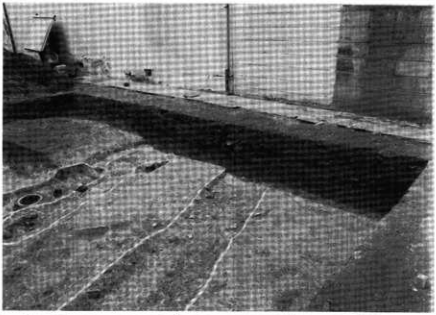
このほかに、図化することはできなかったものの、羽口・炉壁・滓など、鋳造に関係する遺物が出土している。

〈まとめ〉

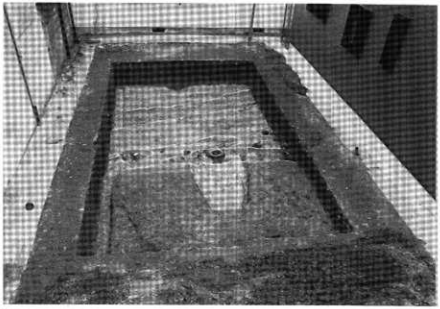
今回の調査では、周囲での状況から古墳時代後期～古代の遺構の発見が期待されたが、調査区北半では地山が大きく削平を受けていたためか、時期を確定することのできる遺構を検出することはできなかった。

しかし、削平後の層中からとはいえ、先述のように鋳造関係の遺物が出土していることは注目に値する。SD501からもこの類の遺物が出土することを考えれば、少なくとも室町時代のものを含むと考えてよかろう。山之内遺跡では、山之内元町を中心として14～17世紀の鋳造関係の遺物が出土する。調査地周辺でもYM99－32次調査(西へ60m)、YM91－11次調査(東へ30m)で同様の遺物が発見されているが(図1)、特にYM91－11次調査とは、鋳造関係遺物の出土に加えて、溝状遺構の存在など、類似した要素が多い。調査地周辺では古墳時代後期から飛鳥時代にかけての成果が特に注目されてきたが、今後、こうした中世の遺構・遺物の性格解明も重要な課題であるといえよう。

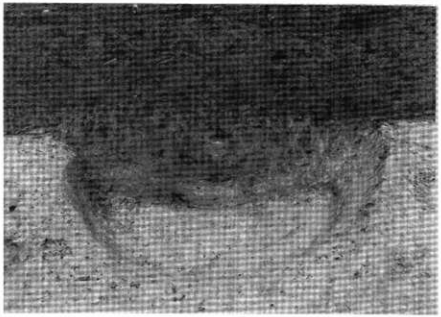
調査区西壁断面
（北東から）



調査区全景
（南から）



SP501断面
（南から）



V　平　野　区

長原遺跡発掘調査(ＮＧ03－３)報告書

・調 査 個 所　大阪市平野区長吉出戸2丁目147−2、149−1
・調 査 面 積　95㎡
・調 査 期 間　平成15年４月21日～平成15年５月７日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査課長　京嶋覚・平井和・黒田慶一・村元健一

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪平野南部に張出している瓜破台地先端部の一つである長吉台地上に位置している[趙2001]。周辺部では、弥生時代後期初頭の墳丘墓が調査されたKR99−2・KR00−2次調査地や、弥生時代の周堤のある住居跡が調査されたＮＧ89−8次調査地がある。このように、調査地周辺は隣接する喜連東遺跡および長原遺跡北部地区において、弥生時代集落と墓域が半径200ｍの範囲内で確認できる学術的にきわめて重要な地域である。また、中世の遺構や遺物も多く検出されていることから中世集落の存在も予察される。本調査に先立つ試掘調査において中世の溝や遺物包含層が確認されたことから、従前の調査成果との関連が期待された。本調査では近世作土層まで重機によって掘削し、以下の地層については人力によって掘削して遺構と遺物の検出に努めた。

本調査および、図２で用いた方位は磁北を示しており、水準値はTP値である。また、古代の土器編年については、[佐藤1992]によった。

図１　調査地位置図

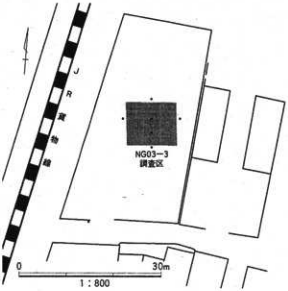


図２　調査区位置図

表1　層序表

NG03-3層序	岩層	層厚	特徴	遺構	遺物	時代	NG層序
第0層	黒褐色中粒砂～砂礫	90	コンクリート片含む盛土	－	－	現代	NG0
第1層	灰オリーブ色小礫含むシルト質細粒砂	7-16	作土	－	－	現代	NG1
第2層	オリーブ灰色シルト質細粒砂	8-12	作土	↓溝	－	近世	NG2
第3層	黄褐色小礫含シルト質細粒砂	10-20	作土	←溝	黒色土器・瓦器	中世	NG3
第4層	にぶい黄色極細粒砂質シルト	40≦	作土、氾濫性堆積層	▼土壙・ピット ▼地震の痕跡	黒色土器・瓦器	中世	NG4A～4B
第5層	灰オリーブ中粒砂質細粒砂～にぶい黄色シルト質極細粒砂	20≦	氾濫性堆積層	－	－	古代	NG5

図3　層序

〈調査の結果〉

1．層序(表1、図3)

調査ではGL－1.8mまでの地層の観察を行った。以下に層序についての所見を述べ、表1で長原遺跡標準層序との対比を行った。

第0層　：黒褐色中粒砂～砂礫で構成される現代の盛土層である。

第1層　：灰オリーブ色含小礫シルト質細粒砂で、現代の作土層である。

第2層　：粘性のあるオリーブ灰色シルト質細粒砂である。本層下面には複数の鋤溝と杭跡があった。肥前磁器が出土したことから近世の作土層と考えられる。

第3層　：黄褐色含小礫シルト質細粒砂で、中世の作土層である。下部には黄褐～オリーブ褐色粗粒砂を主体とする落込みが認められるが、上部との境界は不明瞭である。黒色土器・瓦器 が出土した。

第4層　：東半部は極細粒砂質シルトとシルト質極細粒砂の互層で構成され、西半部に移行するにしたがって上部は粘土質シルト～シルト質粘土へ岩相が変化している。西半部の本層下部層は極粗粒砂で構成されることから、自然流路ないしは洪水による堆積の可能性が考えられる地層である。東半部の本層上面では、柱穴列や性格不明の落込みを検出し、層内において土壙やピットを検出した。また、層内下部では性格不明の浅い落込みと地震の痕跡を検出した。黒色土器や瓦器が出土することから中世の堆積層と考えられる。

第５層　：灰オリーブ～にぶい黄色シルト質極細粒砂で、氾濫性堆積層である。出土遺物は認められなかった。

2.遺構と遺物

a．平安～鎌倉時代

第４層層内検出遺構（図４・５・８）

SX402　東西方向に約6.5m以上、南北方向にも拡がりをもつ性格不明の落込みで、最深部の深さは約0.11mである。須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器が出土した。南方への拡がりは不明瞭であった。また、この遺構の中央部では、第５層を噴砂とする東西方向に延びる地震の痕跡が確認された。

SX403　南北方向が0.85m以上、東西方向が0.4mで、深さ0.04mの浅い溝状の遺構である。底には直径約0.2mで、深さ0.08mの小穴が２個あった。須恵器・黒色土器・瓦器が出土した。

小穴　調査区の北西隅で、南西から北東方向へ並ぶ４個の小穴を検出した。小穴の直径は約0.10～0.20mで、深さは約0.05～0.10mである。

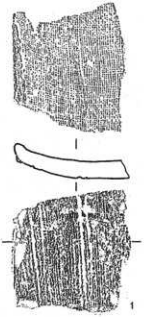


図４　SK401
出土平瓦

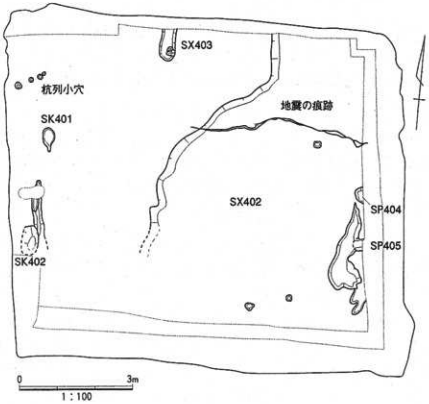


図５　第４層層内検出遺構平面図

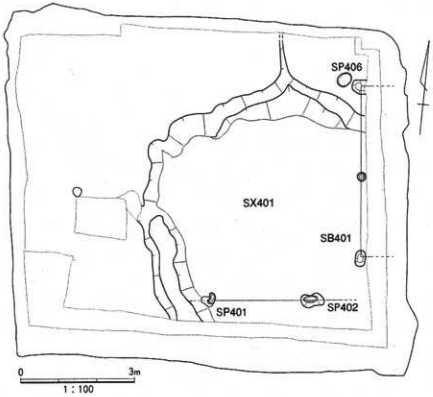


図6　第4層上面検出遺構

SK401　長径0.8m、短径0.3m、深さ0.3mの長円形の土壙で、凹面に布目圧痕、凸面に縄目タタキ痕のある平瓦1、土師器椀A4(平安Ⅰ～Ⅱ期)、黒色土器椀A類が出土した。

SK402　長径0.6m以上、短径0.3m以上、深さ0.3mの長円形の土壙で、時期不明の土師器が出土した。

第4層上面検出遺構(図6・8)

SX401　東西方向に約6m以上、南北方向に約5m以上の広がりをもつ性格不明の落込みで、最深部の深さは約0.3mである。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂である。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器が出土したが、細片のために時期の特定が困難であった。

SB401　南北方向に並ぶ3基の柱穴を検出した。柱穴の大きさは、直径約0.22～0.35m、深さ約0.12～0.28m、確認できた柱痕跡の直径は約0.08mである。また、柱穴間の距離は約2.1～2.4mである。東西棟の建物に復元できる可能性がある。

SP401・402　東西方向に並ぶ柱穴列で、4層上面で2基を検出した。SP401の柱穴の大きさは、直径約0.18m、深さ約0.1mで再度構築した可能性がある。SP402の柱穴は抜取りの後、再度構築したもので、下層の柱穴の大きさは直径約0.28m、深さ約0.23mで、上層の柱穴の大きさは、直径約0.28m、深さ約0.14mである。また、柱穴間の距離は約2.6mである。土師器・黒色土器が出土した。

SP406　柱穴の直径は0.24m、深さは0.14mで、確認した柱痕跡の直径は0.06mある。黒色土器・土師器が出土した。

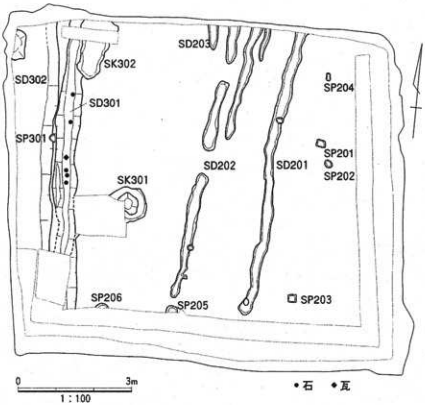


図７　第３層上面および２層下面検出遺構

その他の遺物

5は黒色土器椀Ａ類(平安Ⅲ期)の底部で、内面および外面に顕著なヘラミガキが認められ、高台と体部との接合部にはていねいなユビオサエを施す。6は黒色土器椀Ａ類(平安Ⅱ期)で、体部にはていねいなユビオサエの痕跡が残る。

ｂ．鎌倉～室町時代

第３層上面検出遺構(図７・８)

SD301・302　南北方向に並行して延びる２条の溝である。南壁では、SD301がSD302の下層になることから、SD301が埋まった後にSD302が造られたことがわかった。埋土は双方とも暗褐色シルト質細粒砂である。SD301は幅0.65m、深さ0.3mで、底部には最大長0.2m程の礫や瓦が不規則に残っていたことから、それらが人為的に廃棄または置かれた可能性が考えられる。土師器・須恵器・黒色土器、平安Ⅲ～Ⅳ期に相当する京都系白色土器Ⅲ2が出土した。SD302は幅１m以上、深さ0.34mで、平安Ⅳ期に相当する土師器羽釜7、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・産地不明の焼締陶器が出土した。これらの溝は、坪境溝の可能性が考えられる。

SK301　直径1.00m、深さ0.26mの円形の土壙で、埋土は灰黄褐色礫を含むシルト質細粒砂である。土師器・黒色土器椀Ａ類、平安Ⅰ～Ⅱ期に相当する土師器椀Ａが出土している。

SK302　長径1.5m以上、短径0.6m、深さ0.06mの長円形の浅い土壙である。土師器・黒色土器椀

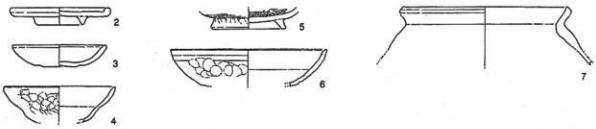


図8　出土遺物

A類が出土した。

c．江戸時代

第2層下面検出遺構(図7)

SD201～203　幅0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mの南北方向に延びる鋤溝で、土師器・須恵器・瓦器・黒色土器が出土した。

SP201・203　直径0.10～0.15m、深さ0.07～0.13mの方形の柱穴で、出土遺物はない。

SP202・204　直径0.15m、深さ0.09mの円形の柱穴で、土師器・黒色土器が出土した。

〈まとめ〉

今回の調査地は、長吉台地の北端部に位置していることから、地形的には南から北へゆるやかに傾斜しており、古代以降に起こった洪水の影響を受けやすい地域であったと考えられる。第4層上面で検出された柱穴列や土壙の存在は、調査地が一時期居住域であったことを示している。その後、近代まで続く作土層が確認できたことから、長らく耕作地であったことがわかった。

調査深度が比較的浅かったために期待された古墳時代以降の遺構はなく、遺物も乏しかった。第5層は長原標準層序の第5層に相当し、奈良時代末期から平安時代に形成された洪水堆積層と考えられる。長原遺跡南部地区では、飛鳥時代以降に堆積した氾濫性堆積層が8層識別されているが、本調査地で確認した第5層は当地域にも長原遺跡南部地区と同様な洪水があったことを裏付けるものといえよう。

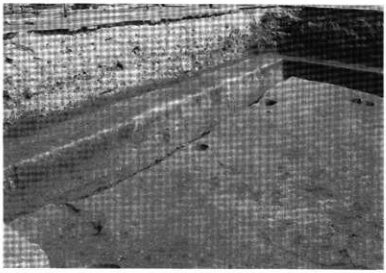
参考文献

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』V

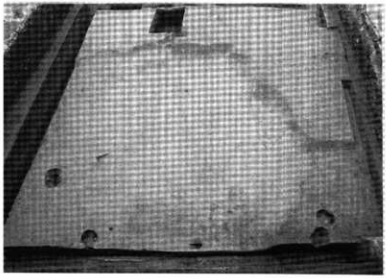
趙哲済2001、「瓜破台地東北部の段丘について」：『大阪市文化財協会研究紀要』第4号

SD301・302
（北から）

東壁地層断面
（北西から）



SX402および
地震の痕跡
（東から）



平成15年度　大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日　平成16年7月30日

発行　大阪市教育委員会
㈶大阪市文化財協会

編集　大阪市教育委員会文化財保護課
（大阪市北区中之島1－3－20）

印刷　一心堂印刷株式会社